

“The Giving Tree”の各国語への翻訳から言語と文化を考える

堀 正

パーソナルコミュニケーション研究室

How is *The Giving Tree* translated into different languages of different cultural background?

Tadashi HORI

Personal Communication

Abstract

The Giving Tree (1964) was written and illustrated by Shel Silverstein. It has been translated into more than 30 foreign languages and read by people of all ages. It is an easy-to-read tale of one tree and one boy who much loved each other. The original could be easily translated into French, German and Italian languages, which all belong to the Indo-European. The Japanese version (1976), however, is very different from the original. It is not only because Japanese language belongs to the Altaic but because it has many original words created in the long history of Japan. The word “love” can be easily translated into the French word “aimer” and “happy” into “heureux.” How masterly can we, however, translate the word “love” into Japanese? What meanings does the word “happy” bear in Japanese? If we couldn’t successfully translate the tale, we would hardly convey what Silverstein intended to send to its readers. In this paper, the author analyzed the tale and showed a tentative translation into Japanese.

はじめに

“The train came out of the long tunnel into the snow country.”——これは、川端康成の小説『雪国』の冒頭部分を英訳したものである。訳者はサイデンステッカー (Edward George Seidensticker, 1921～2007) で、彼は谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫らの文学作品を英訳し、アーサー・ウェイ

リーに続く二度目の『源氏物語』の英語完訳も行った。『雪国』の英訳では川端康成のノーベル文学賞受賞に大いに貢献した。

この訳文についてはさまざまな議論がなされている。訳文では、原文にはない“The train”が主語の位置に出てきているが、2005年にお茶の水女子大学で開かれた認知言語学会第6回大会ワークショップ「川端康成『雪国』の冒頭部分を中心に日本語による認知について考えるー中国語・英語訳と比較対照して」において、この問題が取り上げられた。国際基督教大学の小澤伊久美（2005）は次のように論じている。

川端の原文では、国境の長いトンネルを（話者が）抜けると、そこは雪国であったという気づきがある。雪国はすでにそこに存在していたが、そのことを、話者は自分自身のイマココ（今此処）に結びつけ、イマココでようやく認知したという表現である。つまり、話者（筆者）の心の中の「長いトンネルを今抜けたようだな。ああ、雪国だ。」という認識がそのまま文章に直接表現されているのである。これに対して、英訳では「列車は長いトンネルを出て雪国へ入った。」となっているから、筆者の視点はトンネルを見下ろす外部の地点にあり、あくまで客観的、第三者的に記述している。主語の“train”に定冠詞“the”が付いていることから、かろうじて、この汽車に主人公が乗っているか、あるいはこの汽車が何か重要な役割を果たすのではないかということが想像される。

このようにサイデンステッカーの英訳『雪国』は川端康成のノーベル文学賞受賞に大いに貢献したのだが、“The train came out of the long tunnel into the snow country.”から川端の「国境（くにざかい）の長いトンネルを抜けると雪国であった。」にたどり着くことはほとんど不可能である。川端の文章を読んで日本人が想像する世界をサイデンステッカーの英訳が伝えられているとは言いがたい。この逆も然りであり、外国文学の日本語訳がその言語の雰囲気やその背景にある文化を伝えきすることはやはりできないであろう。翻訳者がいかに言語に精通していて、素晴らしい翻訳を行っても、その翻訳は一般読者に読まれなければ価値がなく、しかも一般読者が翻訳者と同等の能力を持つことはまれであるから、翻訳という仕事は初めからさまざまな制約のもとで行われるといえよう。それでは、翻訳を行うときに、どのような要因を考えなくてはいけないだろうか。

「翻訳」は何を目指しているか

世界の文化を知り、交流を進めたり研究を進めたりするために、われわれは「翻訳」という方法に多くを依存している。翻訳された書物がないと、われわれの知ることができる世界はとても狭いものになってしまう。

世界でいちばん翻訳されている書物は何だろうか？それは「聖書」である。18世紀末までに聖書の

翻訳を持っていた68言語のうち、50はヨーロッパの言語であった。ところが19～20世紀には、世界宣教の波に乗って、アフリカ、アジアの諸言語へと聖書の翻訳が進んだ。“Ethnologue”の第15版(2005)によると、2005年の時点で聖書の翻訳を持つ言語数は約2,400となっている。同書では世界の言語数を6,912としているので、これにしたがうと、翻訳を持つ言語は全体の約35%ということになる。

旧約聖書に登場するイスラエル民族が生活していた当時の世界は、もちろん今の世界とは違う。まして、聖書が2,400もの言語に翻訳されている現在では、そうした言語を話す人々は世界中に散らばっており、きわめて多様で、私たちの想像を超えた地理的・文化的環境に生活していることも想像に難くない。そうしたときに、聖書の内容をただ翻訳しても理解されない。それでは、聖書の翻訳にはどのような方法がとられているのだろうか。初めに、聖書を題材として翻訳と比較文化について論じたナイダ(Nida, E.A., 1966)の“Linguistics and ethnology in Translation-Problems”(Dell Hymes, *Language in Culture and Society*, Harper & Row, 1966に所収)から内容の一部を紹介する。

この論文は次のような問題提起で始まっている。

「ある言語からもう一つの言語への翻訳作業に従事している人は、2つの言語がカバーする全範囲に見られる差異に気づいていなくてはならない。しかし、これまで翻訳の問題はこうした視点から研究されてこなかった。」(ibid., p.90)

この理由として、以下の3点があげられている。

- (1) われわれ(欧米人)が目にしていく翻訳の多くがインド・ヨーロッパ語族に属する言語の範囲内で行われており、この言語地域の文化は比較的等質である。
- (2) 異なった文化からの資料を含んでいる翻訳の多くが単純な文化を示す言語から複雑な文化を示す言語へと行われていたので、対応語を見出すことがあまり難しくなかった。
- (3) 翻訳の文体的・文学的な要因ばかりが強調されたため、翻訳は科学ではなく技術であるとの誤った印象を与えている。

具体的な研究方法は、言語学的な面だけでなくそれ以外の面でも訓練を積んだ人に、聖書をさまざまな土着民の言語に訳すという課題を与え、そこから得られた資料を使って言語学と民族学との関係について考えるというものである。

こうした研究の材料として聖書が選ばれた理由は次の3点である。

- (1) 聖書は非常に多くの言語に訳されているので比較が容易である。
- (2) 聖書の扱っている課題が広範囲の文化的状況にわたっている。
- (3) 聖書に現れている文化は現在の西洋文化の中心をなしているものとは異なっている。

以上のような問題設定でナイダは、翻訳者が犯す2つの誤りとしてまず「逐語訳の誤り」と「外来語を避けようとするときの誤り」を論じる。「逐語訳の誤り」は、原文のことばに対応することばが翻

訳される言語にないとき、文字通りに訳す際に生じる誤りである。また、自国の言語に対する高い価値づけを持っていると「外来語を避けようとするときの誤り」が生じる。

次に、同義語の問題を(1)生態学、(2)物質文化、(3)社会文化、(4)宗教文化、(5)言語文化という5つの側面から扱っている。

(1) 生態学的な面

草木がまばらに生えている場所を表す「砂漠」ということばを熱帯地域の言語に訳すには多くの困難がある。たとえば、マヤ・インディアンにとって「草木の生えていない場所」を理解することは、それがトウモロコシ畑にするために草木の取り払われた場所でなければ不可能である。しかも、そうした場所は文化的にパレスチナ地方の砂漠に対応するものではない。そこで、「砂漠」を「見捨てられた場所」(abandoned place)と訳すことになる。どちらも「人間が住んでいない」という意味で文化的に同じだからである。

(2) 物質文化的な面

新大陸に住む原住民の間では小麦は知られていないため、聖書中の「小麦」を使った表現箇所はできる限り「とうもろこし」で置き換えられる必要がある。

(3) 社会文化的な面

階級・カーストを表すことばの翻訳はとても難しい。たとえば「支配者」「指導者」「金持ち」に相当することばを捜すのは簡単だが、「平民」を表すことばは容易に見つけられない。なぜなら、平民は文化的に取るに足りない、目立たない存在だからである。けれども反対に、未開社会では村の中の社会経済的な成層化がはっきりしており、村の中心からの距離によって上下関係が示されるので、「村の奥手に住む人」という表現を使うことで「平民」を意味させることができる。

(4) 宗教文化的な面

ここでは、「神」に相当する名詞を翻訳するときいつも困難に直面する。なぜなら、「神」に対応する現地語は、使用をはばからせるような重大な意味を持っていることが多く、その一方で、外来語は「異教の神」を意味してしまうからである。

(5) 言語的な面

インド・ヨーロッパ語族に属する言語では普通は名詞で表すものを動詞的なことばで表現する言語があることがホーフ (Whorf, 1956) の研究で明らかにされている。ここでは、こうした言語体系の違いとそれに対処する方法を、(a)音韻論、(b)形態論、(c)語彙の要因に分けて考えている。

(a) 英語などのように強弱アクセントを持つ言語から、高低アクセントを持つ言語に人名・地名な

どをそのまま訳すときには、音韻体系をよく調べる必要がある。

- (b) 上下関係を表す敬語の使い方が重要になっている言語では、相互の地位・身分関係（イエスより律法博士が上）、第三者の存在などに応じて敬語が使い分けられる必要がある。
- (c) ことばの意味は言語間で必ずしも一対一に対応していない。メキシコのトトナク語には、(1)子どもの叫び声、(2)人々の話し声、(3)人々が言い争っている声、七面鳥がごろごろ鳴いている声、(4)人々がとても怒って叫んでいる声、(5)しだいにひどくなっていく騒音、(6)葬式での音、という6種類の「音」を表すのに6つの異なった「語幹」が用いられ、これらを含めて「音」一般を表すことばはないのである。「匂い」を表すことばにいたっては実に16種類もの語幹を使い分けている。

改めて「翻訳」とは何だろうか。「翻訳」とは他国の文化を摂取することであり、その国の理解につながるものである。学術書であれば、それほど文化的背景を考慮しなくても翻訳可能である。しかし、『聖書』や、これから扱う『おおきな木』のように、一つ一つのことばが文脈によって、あるいは文化を異にすると非常に多様な意味を持つような書物を翻訳するにあたっては、その言語に対する十分な知識はもちろんのこと、その言語が使われてきている国・地域の地理的・文化的環境について、できる限り多くの情報を得ていなくてはならない。言語は文化と深く関わりあい、「基本的に文化の一部であり、ことばはそれが表している地域文化的な現象から引き離されては、正しく理解されえない」（Nida, p.97）のである。

翻訳において原文の意味を忠実に伝えることは、文学作品の翻訳においては不可能であろう。翻訳者は、原文の与えた効果や印象になるべく近い効果や印象を読者に与える訳文を作り出すように工夫すればよく、翻訳には翻訳者の主観や好み、価値観までもが入るのは仕方のないことである。しかし言うまでもなく、翻訳者には原文と翻訳される言語に対する深い知識と、一つの原文には一つの訳文しかないとする高い理想が求められるであろう。

『おおきな木』との出会い

著者が担当している講義のレポートとして『子どもとファンタジー』（守屋慶子、新曜社、1994）についてまとめてくれた学生がいた。この本の中で題材として使われていた絵本がシェル・シルヴァスタイン（Shel Silverstein）の“The Giving Tree”（1964）であり、この日本語訳が『おおきな木』（1976）であった。この絵本に登場してくる「木」は何を象徴しているか、などについて、7歳から17歳までの日本人、英国人、スウェーデン人そして韓国人の子どもに尋ね、そこから子どもがこの物語をどのように解釈するかをまとめたものが『子どもとファンタジー』である。講義の中でしばらく『子どもとファンタジー』を取り上げてきた。

その後、“The Giving Tree”が様々な言語に翻訳されていることを知り、フランス語版（“L’Arbre

au Grand Coeur”, 日本語の意味は『おおきな心を持った木』, 1973), 韓国語版(日本語の意味は『惜しみなく与える木』, 1999), ラテン語版(“Arbor Alma”, 日本語の意味は『与える木』, 2002)を入手した。イタリア語版(“L’Albero”, 日本語の意味は『木』, 2000), ドイツ語版(“Der Glückliche Baum—Eine Geschichte vom Leben und Lieben”, 日本語の意味は『幸せな木—命と愛の物語』, 2004)も出版されている。

現在, 同書は30以上の言語に翻訳されて, 世界中で読まれている。英語, フランス語, ラテン語, もちろんイタリア語, ドイツ語も「インド・ヨーロッパ語族」(屈折語に分類される)に属しているため, 文法構造や語彙において多くの共通点がある。しかし, 日本語は膠着語に分類され, 文法構造や語彙においてそれらとは大いに異なるため, “The Giving Tree”と『おおきな木』は似て非なるものになっていると言ってもよい。日本人の多くは『おおきな木』は読んでいても, “The Giving Tree”を読んでいる人は少ない。『おおきな木』の読者が英語原書, フランス語版, そのほかの言語に訳された“The Giving Tree”を読むと, その違いに驚くだろう。

シェル・シルヴァスタインについて

シルヴァスタイン(1930/1932~1999)はアメリカのイリノイ州シカゴに生まれた。子供向けの文学作品の作者として知られているが, 挿絵画家, 作曲家, 作詞家, フォークソング歌手と, 多彩な才能を持っていた。映画音楽の作曲も手がけ, アカデミー音楽賞にノミネートされたこともある。1952年に大人向け雑誌(プレイボーイ)の挿絵画家として仕事を始めた。彼には子供向けの文学作品や絵を書こうという気はなかったが, 友人のトミー・ウンゲラーが彼をウルスラ・ノルトストムの事務所に連れて行ったとき, ノルトストムはシルヴァスタインに子供向けの本を書くよう勧めた。“The Giving Tree”は最も読者に受け入れられた最初期の本であるが, 編集者のウィリアム・コールに初めは出版を断られた。彼はこの本の内容が大人にも子どもにも中途半端で, 売れないからという理由で反対したのである。シルヴァスタインの目には, この本は, 一人は与え, もう一人は取るという2人の人間の物語だったのだ。結果的には大人も子どももこの本に喜んで飛びついた。彼の作品は多くの賞を獲得している。

彼は同時代の詩人の作品を読まなかったため, そうした作品から影響を受けず, それでかえって独自の作風を生み出せたと語っている。彼は, 書かれた作品は紙に印刷された形で読まれるべきだと常々考えていて, 印刷される紙の形, 大きさ, 色も自分で決めた。また自分の作品がペーパーバックで出版されることを認めなかった。

彼には2人の子どもがいた。1970年生まれの娘ショシャンナ(ヘブライ語で「バラ」という意味)は脳動脈瘤のため11歳で亡くなった。彼の親友は「娘の死はシェルの人生でいちばん破滅的な出来事で, そのショックから最後まで立ち直れなかった」と語っている。“A Light in the Attic”(1981)はショシャンナに, また, “Falling Up”(1996)は1984年生まれの息子マチューに捧げられた。

“The Giving Tree”の多様な解釈について

“The Giving Tree”は出版から40数年を経過した今も広く読まれており、アメリカでは小学校の授業で広く教材として取り上げられている。ここでは、リリー財団の援助を受け、宗教・公共生活研究所の後援により1995年に行われた「日常生活の倫理学」というシンポジウムの出席者の中で活発な議論を巻き起こした「“The Giving Tree”は子どもにとってふさわしい本であるか？」という問いに対するさまざまな回答を紹介する。この内容は同研究所発行の雑誌“First Things”の1995年1月号に収められている。以下の訳文は原文をすべて忠実に訳したものではない。また、発言者の所属は当時のものである。

(1) William F. May の回答

一読すると読者はこの物語の無情さに打ちひしがれる。生き生きと葉の生い茂った木は少年にそのすべてを与え続けて最後に切り株だけになり、木からすべてをもらい続けた少年もまた年老いて切り株に座ることになる。読者が木を母なる女性あるいは自然の象徴と捉えたと、この物語は男性信奉主義あるいは環境破壊的な人間中心主義についての寒々とした道德譚になってしまう。

しかし別の見方をすると、現実の人間（特に両親）が与える愛よりも輝かしい愛の可能性がこの物語は暗示している。人間の愛と違って、この木が与えようとしているものは、少年が青年から大人へと変わっていく中で求める欲望を、人知の及ばないほど満たしてくれるのだ。この物語はまた博愛主義の限界をはるかに超えた愛を示している。博愛主義者はその受益者が自分の核心である自己を侵さないように注意を払う。この木も初めは博愛主義的な愛を少年に注ぐが、ついには自己を削りながら破滅にまで至ってしまう。それでも木は幸せだと言っている。この木はいったい何ものなのか。人間と神の狭間にいるのか。

(William F. May: サウスメソジスト大学倫理学教授。Cary M. Maguire 賞受賞)

(2) Amy A. Kass の回答

私の第一子誕生が近づいた頃、母はラビから聞いたという次のような話をしてくれた。「母鳥と3羽のヒナが川辺にたどり着いたが、川幅が広すぎてヒナは自力で渡れなかった。母鳥が1羽目のヒナを羽に乗せて川の中央まで来ると、そのヒナに尋ねた。『私が年とって川を越えられなくなったら、私を運んでくれるかい?』ヒナがためらわず『もちろん、そういたします。』と言い終わらないうちに、母鳥はヒナを川に落とした。2羽目のヒナも同じであった。3羽目のヒナに尋ねたところ、ゆっくりだがよく考え抜いて『私はお母さんのためではなく、自分のヒナのためにそういたします。』と言った。母鳥はとても喜び、そのヒナを向こう岸まで乗せて、やさしく降ろした。」この話は、与えることが「孫やひ孫の世代への投資」であると意味している。つまり、自分

の子どもがまた子どもを儲けるということを信じることなのだが、この不確実な時代にあって、これは躓きのもとであり、思い違いではないのか。シルヴァスタインの物語はこうした思い違いをまったく認めない。自分の子どもに与えるということの本来的価値を生き生きと描き、全霊を傾けて子どもに与えることのできる母親に間違いなく訪れる幸せを示している。

木は初めから少年に絶対の愛を注ぐ。木はいつも少年を迎え入れ、少年の物質的欲求を満たしてくれる。それどころか木は心の成長も助けてあげる。しかし時の経過とともに、かつて少年を喜ばせた楽しみはその力を失ってしまう。少年が異性を求め、新たな楽しみを探中、木は少年の欲望を満たすために、自らの大事な実りであるリンゴを少年に与える。少年の要求は続くが、あたたかな家庭を築くという夢ははかなく消え、悲しみから逃れるために船を求める。木は幹を与えることで少年の願いに応える。最後に少年は年老いて弱ってしまうが、木のある場所に戻ってくる。多くの苦しみを味わってもなお少年は希望を持っている。これは木が示す知恵ではないだろうか。これが幸せの十分な根拠ではないだろうか。

(Amy A. Kass：シカゴ大学人文学部上級講師)

(3) Marc Gellman の回答

この本に登場するのは、純粹で無私な“giver”である木と、その木からすべてを求める甘やかされた恩知らずの少年である。どちらも互いに愛しているとしても、この2つの愛は質的に異なっている。木の少年に対する愛は無私であるのに対して、少年の木に対する愛は利己的である。木が少年に与えるものは、木の愛を証拠立てるためではなく、木の愛を示すためにある。木が与えるのは、そうすることは愛するもののために当然することだからである。愛とは自己を無にして他者に捧げることである。木の行いを功利主義的に判断すると、木は少年をわがままな子にしてしまったのであるから、とがめられるべきである。しかし、木の動機を義務論から見ると素朴なものであると判断される。

私は、木が善意から行ったこのような行為は愚かなものであったと考えるにいたったのだが、この愚かさには不思議と畏怖の念を抱くのである。その理由はおそらく、木が仏陀のようで、この利己的で傷ついた世界にあるすべてのものを自己のものとして守ろうとすることにまったく頓着していないからである。仏教徒はこの徳を現世への執着から解放されること（解脱）であると考え、ダルマの核心にある貴い4つの真理の第3番目に位置づけている。年老いた少年は最後に木の幹に座ることで、この解脱に到達したのであろう。木も少年も解放されたのである。

(Marc Gellman：ニューヨーク・ベース律法寺院ラビ)

(4) Midge Decter の回答

シルヴァスタインは一見するとこの本で「与えること」について考えようとしたようだが、彼の描いた挿絵から判断すると、この物語が主張しているのは、成長すること、年老いていくこと

だったのではないだろうか。彼が挿絵画家としても有名であることに注意してほしい。そこで、子どもの目線からこの本を見ると、最初は少年が「ヒーロー」である。少年は成長していく中でその子どもらしさを失っていく。木は木のままであるが、それでも次第に少年にあげられるものが少なくなり、年老いていく。最後には切り株だけになるが、この切り株も役に立つことが分かってうれしい気持ちになる。これは、絶えず搾取され続ける中、じっと一人で自己犠牲を甘受している話ではないか。

これは「本当に与えること」についての物語なのだろうか。控えめに言っても“The Giving Tree”は、文章からも挿絵からも少年の成長の過程について思いやりを持っているとは言えない。この物語が伝えていることは、幼児期以降の人生は墮落していく不快なものだということである。

(Midge Decter : Institute on Religion and Public Life の特別功労研究員)

(5) Gilbert Meilaender の回答

少年は絶えず木のところに戻ってくるが、どうしてなのだろうか。それは、木が単に少年の欲求を満たしてくれるからではない。「少年が木を愛していた」からなのだ。木は少年が欲求を満たすことを助けてくれる。少年が木からすべてを取っていき、木はひたすら与え続けているように見えても、少年は木を愛していたのだ。木の幹に彫られた「ぼくと木」の文字を見れば、その心が決して変わることはないものであることが分かる。切り株だけになっても、この愛のしるしは残っている。少年が戻ってくるのは、木がそれを望んでいるからではない。木が愛を持っているから少年は自由に去ったり戻ってきたりできるのだ。

それでは、いったい木は傷ついてしまったのだろうか。木が自らについて知っている以上にわれわれ読者が木を知ってしまったときにのみ、木が幸せなときに取って代わって不幸でないのだと読者が気づかせようとしたときにのみ、そして、もっと大切なのは、愛の絆の中で互いに依存するのではなく、一人ひとりが自立して成長していくことによるのみ幸せが守られるということを読者が考えたときにのみ、木は傷ついてしまうだろう。木は少年が戻ってこないのではないかという危惧を常に抱きながら与えている。少年が行っていることは、木が少年に求めたことではなく木が深く望んだことであるから、木は幸せなのだ。

(Gilbert Meilaender : オバーリン大学宗教学教授)

(6) Mary Ann Glendon の回答

物語の冒頭、少年は自分が宇宙の中心だと思っている。一般に子どもは自分がかわいがってくれる人たちと過ごすうちにいろいろな真実を学ぶようになるのだが、この少年はいつまでたってもそれを学ばない。人は自分がそうされたいと思うことを人にもしてあげなさいという考えに少年は気づかない。少年は自分が何か欲しいときにだけ木のもとにやってくる。しかし、年老いて休むこと以外に求めるものがなくなったとき、少年は木に残されていた切り株に腰をかけ、木は

「しあわせ」になる。

シルヴァスタインがこの本で目指したものが何であれ、愛についての彼のメッセージは、特に最後に「木はしあわせでした。」という一行を見ると、子どもたちにも同じように伝わっていることだろう。少年の立場で見ると、「搾取するもの」として最後は幸せも成功も収めることができず、自分の惨めな状況を悟る。しかし、シルヴァスタインは読者に木の立場に立ってほしいと願っているように見える。無条件の愛を与える幸せな木のイメージに皮肉を込めようとしても、この話を聞いている子どもたちにこの皮肉は届かないだろう。おおかたの子どもは木を親のような愛情を持った姿として捉える。しかし、木の本性は恐ろしい母親であろう。“The Giving Tree”は額面どおりに受け取れない。

(Mary Ann Glendon：ハーヴァード大学法学教授。Learned Hand 賞受賞)

(7) William Werpehowski の回答

私の6歳の息子が以前「幼稚園で」“The Giving Tree”の話を聞き、今度は自分で読んでみてわくわくしたと語った。「木はたくさん与えたと思う？」と尋ねると、息子は「木は少年を愛していたし、少年を幸せにしようとしていたから、そうは思わないよ。」と答えた。彼にとってこの物語の関心は、人が時には惨めになっても、どうしたら幸せな結末を迎えるように他の人を愛せるかという一点に向けられている。

「男の子は木の幹をきりたおし、ふねを作って、行ってしまいました。」「木はしあわせでした。けれど、ほんとうではなかったのです。」とシルヴァスタインが描いたとき、なぜ「けれど、ほんとうではなかったのです。」と表現したのだろうか。この疑問に対する答えはさまざま、この一言が物語を豊かなものになっている。少年が行ってしまっ、おそらく絶対に戻ってこない知っているから、木は悲しい気持ちになる。何もあげるものが残っていないから木は「ごめんね」と言っているのだ。木に対する少年の思いやりを、この状況下で決定的に疑問視してしまうような行為が起きたことを嘆いているのかもしれない。つまるところ、木がもはや木でない、もっと正確に言うと、木がもはや「茂る」ことがないから、木は本当に幸せでないのだ。

木は常に変わることなく、少年を絶えず気遣いながら、自らが失っていくものを耐え忍んでい。木は少年が戻るのを辛抱強く待ちながら、彼が現れたら喜んで迎えて、彼のためにしてあげられるように待ち構えている。物語の終りで、木はその愛によって、木が愛したものと再び一緒になる。

この不即不離の関係は、いつまでも共にあるという愛が求めているものである。われわれのほとんども、常に多くの人を愛し、求めている。人と共にいることで、われわれは幸せになるのだ。

(William Werpehowski：ヴィラノヴァ大学神学・宗教学科准教授)

(8) Leon R. Kass の回答

子どもに“The Giving Tree”を読み聞かせる理由はさまざま挙げられる。この物語を聞くことで、場にふさわしい態度や健全な情操が育ち、模倣を通じてよい行いができるようになる。われわれは母親の乳や大地の恵といった自然の恵みによってはぐくまれる。われわれは葉やリングなどの再生可能な資源だけでなく、枝や幹のような代替できないものも使って生きている。

この木は女性と捉えられるが、母の愛というイメージを負わされている。少年は木のものだから、木は私を捨てて無条件に少年を愛している。木が幸せなのは、少年の幸せに一役買っているからである。いくつになっても、子どもの役に立てる母親は祝福される。

特に「伝統的な社会的・性的役割から開放された」読者には、この木が示す自己犠牲的行動は常軌を逸していると映るだろう。木はなぜ自分の余りだけを与えないのか。なぜ先のことを考えないで与えつくしてしまうのか。

母の愛に打算はない。木が自己を削るのは、自己否定であると同時に自己実現でもある。自分の蓄えを常に将来のために備えているような人は幸せに生きないし、幸せに生きられないであろう。(Leon R. Kass: シカゴ大学社会思想学部教授。Addie Clark Harding 賞受賞)

(9) Timothy P. Jackson の回答

“The Giving Tree”は若者に寛容のすばらしさを教えてくれるだけでなく、老人を元気づけて若者に——依存してでも——望みを託そうという気にさせてくれるので、すばらしい物語である。

第一の教訓は、互いに必要とされるのはよいということである。木は自虐的で少年は恩知らずであると反論されるかもしれないが、物語では初めから「木も少年も互いに愛していた」と知るのである。さらに木の愛は人間味のない抽象的な善意ではなく、相互的な関係を求めている。母親と同じように、木は少年がいないと悲しみにくれる。一方、この少年は自己にとらわれている。成長するにつれて、少年はあまり木のもとに来なくなり、変化を求めるようになる。

まずわれわれは木に焦点を当てるべきである。少年は立ち止まって「ありがとう」と言わず、環境を破壊しないように資源を使おうとはしない。少年が船旅に出ようとした理由は不明だが、中年の危機に遭遇したか、妻や家族を早くに失ったために、旅に出てその悲しみを忘れようとしたのかもしれない。ただ一点の例外、つまり木が何も与えられなくなるときを除いて、木は少年のために与え続けることで幸せになる。

これは悲しい物語なのか。人生が悲しいと同じようにこの物語も悲しい。われわれはみな強く愛を求め、幸運であれば、他者を利用し、使い尽くして大きくなっていく。木から葉が落ちるように、われわれの人生でも涙が落ちる。われわれが少年を責めれば責めるほど、人間の存在を非難しなければならなくなる。木を責めれば責めるほど、親として行動することを非難しなければならなくなる。

木は切り株だけになってもなお少年の愛をとどめている。「ぼくと木」と彫られたハートのしる

しは、あらゆる変化を乗り越えて残り、愛の証となっている。愛はすべてを引き受け、命が終わろうとも愛は決して終わることがない。

(Timothy P. Jackson：スタンフォード大学宗教学科の准教授)

(10) Richard John Neuhaus の回答

植物としての木の最後は悲しく、生い茂ることはない。しかし、少年に対する愛の視点から木を定義すると、すべてはうまくいっている。少年も表面上は恐ろしく利己的だが、木を愛していた。年老いても少年は“the boy”と呼ばれたが、これは少年が決して成長しなかったことを示しているのかもしれない。あるいは、木にとってはいつまでも“Boy”であった少年が、ひたすら木だけを愛していたからかもしれない。

少年が木をとて愛していて、木が幸せだったと聞かされた後、「しかし時は過ぎていく」という一文に突き当たる。それまですべては牧歌的であった。一転して、時の試練が訪れる。少年はほかの愛を求め、木は一人ぼっちになる。“Y.L.”は愛している恋人のイニシャルだったかもしれない。木は“Y.L.”を嫉妬したのかもしれない。少年が彼女と木陰で休んでいるとき、2枚の葉が涙のように落ちた。私は木が嫉妬心を抱いたとは思わない。

木が幸せになるためには、少年の存在と彼が求めるものを与えられる能力が必要であり、とりわけ後者の必要性が高い。少年は「ぼくは欲しい」と言い続ける。木は（愚かにも）このことばを「必要だ」と理解して、会うたびに「幸せになっておくれ」と言う。木は少年が幸せになってくれると信じていたのか、あるいは幸せになってくれるように元気づけていただけなのかどうかは定かでない。

木が与えられないものを少年が欲しがりも要求もせず、木が与えられるもの、つまり「座って休むための静かな場所」を少年が要求したとき、木と少年は調和した結末を迎える。このとき初めて、少年は欲しいものではなく必要とするものが何かを語るのである。

少年の人生は幸せだったようには見えない。少年が妻や家族が欲しいという野望を抱いて木の枝を持って去っていったとき、彼が一度だけ微笑むのを見るが、これは自虐的な笑いではなかったか。しかし少年は、木の中に、そして木の愛の中に幸せを見出す。彼が戻ってくるのは何かを求めてではなく、木に会うためなのである。

ここでもうひとつの省略文に注目する必要がある。少年が船を作るために幹を持っていったあとに、「木はしあわせでした。けれど、ほんとうではなかったのです。」という一文が置かれている。幹を与えてしまった木の行為は、木を幸せにしないであろう。少年は決して戻ってこないし、木にももう与えるものが残っていないから、木は本当は幸せではないのだ。けれども少年は戻ってきた。木もまた与えられるものを持っていたことを知る。今度こそわれわれは、省略なしに「木はしあわせでした」と読むことができるのだ。少年が本当に幸せになるかの保証はどこにもない。しかし、おそらく少年は幸せになったのだろう、少なくとも以前よりはずっと幸せに。

時が過ぎて少年がいなくなったとき、木は少年と共にいたときの幸せを思い出して、うれしい気持ちになるだろうか。木は与えすぎたことを後悔しなかっただろうか。木に幹も枝も残っていて、葉やリンゴをつけることができるならば、木は別の少年を世話して、新たな関係を始められるだろう。

これは一本の木と一人の少年の物語ではない。この物語は、この少年にとっての木、この木にとっての少年が、時の経過の中で互いにどのように愛し合い、互いを必要として求めていたかを描いたものである。
(Richard John Neuhaus：雑誌 First Things 編集長)

以上に示したように、“The Giving Tree”は大人が読んでも多様な見方ができる本である。もちろん子どもが読んでも、その生育環境や文化的背景の違い、また時代によって、さまざまな意見が出てくることは間違いない。1964年に出版され、40数年を経ても、この本はさまざまな議論を巻き起こしている。しかし、“The Giving Tree”は当時のまま何も変わらずに存在し続けている。“The Giving Tree”の表現はとても易しく、登場人物も一本の木と少年であるが、その平易さゆえにかえって多様な読み方を可能にしているとみることができる。

『おおきな木』を読む

それでは、「翻訳は何を目指しているか」と「“The Giving Tree”の多様な解釈について」をもとにして、『おおきな木』を分析していく。また、以下の分析のほとんどは「“The Giving Tree”の多様な解釈について」を読む以前に行っていたものであることを記しておく。

(1) 書名について

英語原書の書名は“The Giving Tree”で、直訳すると「与える木」である。木は少年が小さいときには「遊び場」や「木陰」を与え、少年の成長に伴い、また彼の求めに応じて「りんご」「木の枝」そして「木の幹」までも与えた。そして最後に、年老いた少年が戻ってきたときにも、彼が腰掛けられるように「切り株」を与えた。シルヴァスタイン自身が語っているように、“The Giving Tree”は、一人は与え、もう一人は取るという2人の人間の物語なのである。彼が使っている英語の“Giving”ということばの背景には、キリスト教における「神」と「幼な子イエス」があると言われている。

日本語版はどうだろう。訳者は『おおきな木』という題名をつけた。「おおきな」は日本語版の帯に記載があるように「心のおおきな」という意味で使われている。この点で、フランス語版はもっとはっきりと「おおきな心を持った木」と訳している。ラテン語版は原書に忠実に「与える木」となっている。

けれどもシルヴァスタイン自身は、原書の中でこの「木」が「おおきな心」を持っているよう

には描いていない。「かぎりなく与える木」と「ひたすら取る少年」を淡々と描いている。書名は「本の顔」であるから、書名によって読者が予断を持つと、それが読み方を方向づけてしまう。また、以下で触れていくが、“The Giving Tree”そのものが、日本語の書名に合った、もっと言うと日本文化に合った表現に作り変えられてしまっているとも考えられる。

英語原書からフランス語に訳す場合は逐語訳でも原書の内容を十分に伝えられる。しかし、日本語訳は原書が伝えたかった「意味」を本当に伝えられているのだろうかという疑問が湧いてくる。原書に忠実に訳すと、日本の読者には受け入れられない内容の本になってしまっただろう。この点で、『おおきな木』は“The Giving Tree”の翻訳というより「翻案」（原作の筋や内容をもとに改作すること。また、改作したもの）に近く、別の本となってしまったと考えられる。

(2) 最初に「木」が登場してくるときの表現方法

“The Giving Tree”は“Once there was a tree…”（昔、木があって）で始まっている。フランス語訳の“*Il était une fois un arbre…*”も意味は同じである。ラテン語訳の“*Erat quondam arbor…*”ももちろん意味は「かつて木があった」であり、名詞そのものの変化で単数・複数を表すため、冠詞も付与されていない。日本語訳はどうだろう。「むかし りんごのきが あって」で始まっていて、この「木」が「りんごの木」であると、初めに読者は知ってしまうのである。ちなみに韓国語訳でも「昔、木が一本あって」となっていて、原書に忠実である。もちろん表紙の絵を見れば赤いりんごが描かれているので、「この木」が「りんごの木」であると一目で分かるが、「むかし りんごのきが あって」の部分の挿絵にはりんごは描かれていない。

このような書き出しになったのは、おそらく語調を整える意味もあったと考えられる。しかし、物語の進め方として、初めから手の内を明かしてしまっているわけである。反対に、英語で“Once there was an apple tree…”, フランス語で“*Il était une fois un arbre de pomme…*”とするのも、物語の始まりとしては、きりっとしない。この点で、日本語版は意識を行ったと言えよう。

(3) 最初に「少年」が登場してくるときの表現方法

“The Giving Tree”は“a little boy”として「少年」を登場させている。フランス語訳の“*un petit garçon*”も、ラテン語訳の“*puer*”も同じ意味である。日本語訳では「ちびっこ」となっている。『大辞泉』によると、「ちびっこ」とは「小学校低学年ぐらいまでの子供を親しんでいう語」であり、男女の区別がない。したがって、“a little boy”の訳語としては文字通り「ちいさな男の子」が適訳であろう。

(4) 木と少年の関係

“The Giving Tree”では、「木」を女性人称代名詞の“she”で受けて、“she loved a little boy”（木はちいさな男の子を愛していた）と表現している。フランス語訳の“*cet arbre aimait un petit*

garçon”もラテン語訳の“*quae puerulum amabat*”もほぼ同じ表現である。日本語訳はどうかというところ「かわいい ちびっこ なかよし」となっていて、“love”は「なかよし」と訳されている。再び『大辞泉』を見ると「なかよし」とは「仲のよいこと。また、その間柄の人」であり、「なかよし」は“love”とかなり意味を異にすることばである。「なかよし」は一体感を感じさせ、対等の関係を読者に与える。それに対して“love”は、対等であったとしても「一方が他方を愛する」「一人の個人がもう一人の個人を愛する」という方向性を持っているといえる。やはり「木は少年を愛していた」というのが、シルヴァスタインが伝えたかったメッセージだったのだと考えられる。それゆえ木は惜しみなくすべてを少年に与えたのであり、だからこそ“Giving”が生きてくるのである。

一方、日本語訳の「なかよし」という表現には、土居健郎(1971)の『甘えの構造』で展開されている「甘え」の心が集約されていると考えることができる。少年は木の好意に「甘えている」のが、日本語訳での「木と少年の関係」なのである。そして、物語が最後まで「なかよし」の関係を引きずってしまっているようにみえる。

(5) 時の経過とともに少年はどのように変わっていくか

原書では“he”という男性人称代名詞で受ける箇所があるが、最後まで一貫して少年を“the boy”と描いている。フランス語訳もほぼ同じで、一部で“il”という男性人称代名詞で受けているが、最後まで“le petit garçon”か“le garçon”と表現している。ラテン語訳で使われている“ille”も男性人称代名詞である。日本語訳はどうだろうか。時の経過とともに「ちびっこ」は「そのこ」となり、「おとなになったそのこ」から「おとこ」を経て最後は「よぼよぼのそのおとこ」へと表現を変え、歳をとっていく。

次項で述べるが、木は少年を“Boy”(原書)、「ぼうや」(日本語訳)、“mon enfant”あるいは“mon garçon”(フランス語訳)と呼んでいる。ラテン語訳では“Boy”に相当する呼びかけ語は使われていない。木にとって少年は、ずっと幼いときの「ちいさな男の子」のままなのである。時の経過は“the boy grew older”で表現されている。

読者にとっては、日本語訳のように、時の経過が分かる表現をとったほうが理解しやすく、親切といえるだろう。しかし、時の経過は、シルヴァスタイン自身が描いたすばらしい挿絵を見れば一目瞭然である。日本語訳は絵がなくても理解可能であるが、絵を見ながら物語を理解するのが絵本の特性であると考え、絵本としての面白味を失ってしまっている。

(6) 木は少年を何と呼んでいるか

原書では一貫して“Boy”で、しかも頭文字は大文字となっている。“Boy”は固有名詞ではないが、文章中で分かりやすくするためか、特別な意味を持たせたと考えられる。フランス語訳でも、最後に“mon garçon”と呼びかけているのを除いて、ずっと“mon enfant”である。“enfant”

は「(大人に対する) 子供, 児童」であり, “garçon”は「少年」を示すことから, フランス語の訳者は, 木が最後に「ずっと変わらない少年」を強調しているように訳したと考えられる。日本語訳でも「ぼうや」(幼い男の子を親しんでいう語。「や」は接尾辞)で通している。著者は, あえてこの呼びかけ語を省いて訳してはどうかと考える。

(7) 少年に対する木の気持ち

“the tree was happy”とシルヴァスタインが表現したときの“happy”には, どのような意味が込められているのだろうか。フランス語訳も“l’arbre était heureux”となっていて, 文法的にほぼ同じである。ラテン語訳では形容詞の“laetus”と動詞の“gaudeo”が使われている。

“happy”は「(人が…のことで) うれしい [about, at, with, over]」「人は…してうれしい [He is happy to know it.]」という意味で, 限定用法として「幸せである」という意味になる。フランス語の“heureux”も用法としては「幸福な, 幸せな」「…をうれしく思う」となる。日本語訳では“happy”は「うれしかった」となっている。「うれしい」とは「物事が自分の望みどおりになって満足であり, 喜ばしい。自分にとってよいことが起き, 愉快で, 楽しい」「相手から受けた好意に感謝しているさま」(大辞泉)である。これに対して, 「幸福」とは「満ち足りていること。不平や不満がなく, 楽しいこと。しあわせ」(大辞泉)という意味である。

“the tree was happy”という文は, どの場合も木が少年に何かを与えることができた後に置かれている。少年のときは「木陰」を, 成長とともに「りんご」「木の枝」「木の幹」を与え, すべてを与えつくしたあと, 最後に少年が座るための「切り株」を与えることができて, 木は“happy”になっている。木はすべてを与えたが, それに対して少年から何かをもらおうとはしていない。

これは, 新約聖書における「アガペー」(agape: キリスト教的愛)を思い起こさせる。「アガペー」に対比させられるのは「エロス」(eros)である。「エロス」が愛の対象のもつ価値に惹かれ, 対象を介してより高い価値に向かう自己中心的な愛であるのに対して, 「アガペー」は対象そのものに向かう他者中心的な愛で, 自己犠牲・自己否定的な性格の愛である。「アガペー」は「求めるところのない無償の愛, 見返りを求めず, 一方的に与える愛」なのだ。ここまで考えると, “happy”は「うれしい」という一過性の感情ではなく, 与えることができて「しあわせ」と解釈するほうが, シルヴァスタインが訴えたかったことに沿うものだと考えられる。

この一方で, 5回繰り返される“happy”がすべて同じ重要度で発せられているのかは検討する必要がある。木が少年に与えるものがあり, それを与えられたときの“the tree was happy”と, すべてを与えつくして切り株しか残らなかったときの“the tree was happy”では, 読者の受ける印象が異なっているであろう。しかし, 子どもの読者は“the tree was happy”をこれほど深い意味で理解しない可能性がある。

(8) 「たのしくすごしておゆきよ」という木のことばの意味

この部分は原書では“be happy”, フランス語訳では“sois heureux”となっている。ラテン語訳の“laetus esto”も同様の意味で、直訳すると「happyであるように」となる。この“happy”はなんと訳したらよいだろうか。確かに、木陰で遊んだり、幹に登ったり、枝にぶら下がったりするのは「たのしい」から、この場合、「たのしくすごしておゆきよ」は適訳かもしれない。しかし、「たのしい」も「うれしい」と同じく一過性の感情で、過ぎてしまえば「たのしさ」も「うれしさ」も消えてしまう。とりわけ、木が「わたしの みきを きりたおし ふねを おつくり それで とおくに いけるでしょう... そして たのしく やっておくれ。」といている箇所の「たのしく やっておくれ」は「幸せになっておくれ」と訳すほうが、木の気持ち、つまりシルヴァスタインが訴えたかったことを的確に表現するであろう。しかし、これは大人の視点からの解釈になる危険性がある。

(9) 「たのしくやれるよ」という木のことばの意味

この部分は原書では“you will be happy”, フランス語訳では“tu seras heureux”, ラテン語訳では“gaudebis”で、いずれも「あなたは happy/heureux になるでしょう」という意味である。あるいは、木の気持ちからすると「happy/heureux になっておくれ」というのが適訳かもしれない。お金を手に入れたり、家を建てたりして「happy/heureux になっておくれ」ということは、やはりこの“happy”は「しあわせ」という意味がふさわしいと考えられる。日本語訳の「たのしくやれるよ」は、前述したように一過性で、あえて言うと享樂的な意味が読み取れる。

(10) 「おまえ ふねを くれるかい」という表現

原書では“Can you give me a boat?”, フランス語訳では“Peux-tu me donner un bateau?”となっている。ラテン語訳の“Vin' mihi scapham dare?”も同様の意味である。これより前の部分で、同様の表現が「おこづかいを くれるかい」「ぼくに いえを くれるかい」と訳されているが、「おまえ ふねを くれるかい」の場合、「おまえ」は決して相手を尊敬してではなく、「親しい相手に対して、または同輩以下をやや見下して呼ぶ語」として使われていると考えられる。訳者は、少年の木に対する親しみをこめて「おまえ」と呼ばせたのか、ただ物欲を満たすための存在として少年に木を「おまえ」と呼ばせたのか、いずれにしても現代的な意味での「おまえ」はこの場所にふさわしくないと考えられる。そこで、著者は「ふねを くれるかい」と訳すこととした。

(11) 「だけど それはほんとかな」のほんとうの意味

原書では“but not really”, フランス語訳では“mais pas complètement”と、いずれもほぼ同じ意味である。ラテン語訳はどうだろうか。この部分は“sed non intus et in cute”と訳されてお

り，“sed”は“but”，“non”は“not”，“intus et in cute”は“wholly”なので、やはり原書と同じ意味となる。この部分は、船を造るために少年が木の幹を持って行ってしまった後に置かれている。したがって、木はもうこれ以上少年に与えるものがなくなってしまったために、少年が戻ってきてくれないのではという不安を抱いたことを暗に表していると考えられる。それゆえ、この部分は「木は“happy”と言っているけど、本当は“happy”でない」と理解することができる。また、「ほんとかな」では、読者に判断が委ねられてしまっている。そこで、著者は「けれど、ほんとうではなかったのです。」と訳してみた。

(12) 「こまったねえ」あるいは「すまないねえ ぼうや」と言うときの木の気持ち

原語では“I am sorry, Boy.”、フランス語訳では“Hélas, mon enfant.”となっている。“Hélas”は「ああ！、悲しいかな、残念ながら」という意味の間投詞で、“I am sorry”とは微妙に意味が異なると考えられる。木は4回、少年に対して“I am sorry”と言っている。最初は「おこづかいを くれるかい」と言われて、2回目は「りんごもない」ことに対して、3回目は「なにもあげられない」ことに対して、4回目目は、木が少年に与えるものがまったくなくなったことに“I am sorry”と答えている。「こまったねえ」は木が自ら困惑している状態を表し、「すまないねえ」は子どもに対する表現として古い印象を与えるので、著者は「ごめんね」と表現するほうが場面にはふさわしいのではないかと考える。

(13) 「わたしはただのふるぼけたきりかぶだから」

原語では“I am just an old stump.”、フランス語訳では“Je ne suis plus qu’une vieille souche.”、ラテン語訳では“Vix mihi superstes stipes.”である。「ふるぼけた」とは「古くなって、きたならしくなった」という意味で、少なからずネガティブな価値を付与されている。訳者はシルヴァスタインがoldにそうした意味をこめて使ったと解釈したわけだが、「ふるぼけた」と「年老いた」では、読者が受ける印象はかなり変わると考えられる。したがって、そうした印象を与えないようにするためにも、この部分は「古くなった」と訳すほうが適切である。

(14) 「よぼよぼの そのおとこ」

原語もフランス語訳も「少年」となっている。ラテン語訳は“ille”と男性人称代名詞で受けている。日本語訳は「時の経過によって年老いた少年」をありのままに描写している。シルヴァスタインは、一方で容赦ない「時の経過」を描きながら、他方では変わることはない「あのときの少年」(the boy)を描くという離れ業をやっているのだ。日本語訳では「時の経過」は描いたが、「あのときの少年」は最後になくなってしまった。したがって、日本語としてはこなれていないが、ここも「年老いた男の子」と訳すほうがよいと考える。

(15) 「わしは もう つかれはてた」

原語もフランス語訳も直訳すれば「私はもう疲れ果てた」となる。「わし」は「現代では男性が、同輩以下の相手に対して用いる一人称の人名代名詞」「目下に対して年配の男性が用いる」とあるように、老人が自分を指す場面で使われることが多い。したがって、「あのときの少年」にこのセリフを言わせるならば、「わし」を使わずに「もう つかれはてた」とだけ言うほうが、この場面にはふさわしいのではないかと考える。

(16) 「この ふるぼけた きりかぶが こしかけて やすむのに いちばんいい」

原語では“is”がイタリック体となっている。つまり、「切り株は年老いたけれど今でも腰掛けて休むのにはいい」という意味で、フランス語訳でもその意味をうまくつかんでいる。「いちばんいい」は何に対して「いちばん」なのか不明であり、シルヴァスタインがイタリック体の“is”に込めた意味をつかみ損なっていると考えられる。

(17) 「おとこは それに したがった」

原語では“*And the boy did.*”，フランス語訳では“*Et c'est qu'il a fait.*”となっていて、日本語訳のように「したがった」（意のままにする，服従する）という意味はない。ラテン語訳は“*Dicto audiens consedit ille*”であり、「彼はそれに従って座った」という意味になる。木は少年に「すわるように」促し，少年は自らの意思でそうしただけなのである。年老いるまで少年は木からすべてを取って行って，木に対して感謝のこぼ一つも掛けていないのに，最後に素直に従ってしまうのは，不自然である。「男の子は腰をかけ，休みました。」というのが，ここの訳としてはふさわしい。

(18) 木の幹に彫られたイニシャル

木の根に近いほうのイニシャルは，原語では“*M.E. & T.*”（*T.* は“*Tree*”を表している），フランス語訳では“*MOI & A.*”（*ぼく*と木：*A.* は“*arbre*”の頭文字），日本語訳では「たろうとき」となっている。しかし，原語をよく見ると“*ME*”ではなく“*M.E.*”と名前のイニシャルになっている。シルヴァスタインは“*Me*”という意味をこめて“*M.E.*”としたのではないかと考えられる。訳者は「たろう＝ぼく」と考えているのだろうが，「たろう と き」では，木との結びつきが希薄である。一方，男の子が大きくなって恋人ができたときに，幹に彫られたイニシャルは“*M.E. & Y.I.*”となっている。フランス語訳では“*MOI & J.F.*”である。ちなみにラテン語訳では，それぞれ“*EGO & Arb.*” “*EGO & Amasia*”となっている。日本語訳はどうかというと，よくある「たろう と はなこ」である。男の子が木の幹を持っていったとき，“*M.E. & T.*”と彫った部分はそのまま残していった。

原書では“*M.E.*”であるから，日本語訳で「たろう」としたのは正しい訳かもしれない。ただ，

シルヴァスタインが“Me”という意味をこめて“M.E.”としたのではないかと考えるとき、「たろう」ではなく「ぼく」としたほうが、木に対する男の子の思いが強く表現されたと考えられる。

“The Giving Tree”の私訳の試み

ここでは、以上の検討をもとに、著者が“The Giving Tree”の私訳を試みる。

むかし、一本の木がありました。

木はちいさな男の子をとてまかわいがっていました。

まいにち、男の子はやってきて、木の葉を集め、

それで王冠をこしらえて、森の王様をきどりしました。

男の子は木の幹によじのぼり、枝にぶら下がり、りんごを食べました。

男の子は木とはかくれんぼをして、遊び疲れると、木かげで昼寝をしました。

男の子も木が大好きでした。とてまとも好きだったのです。

だから木はしあわせでした。

けれども時は過ぎていきます。

男の子は大きくなって、木はたいてい一人ぼっちでした。

ある日、男の子がやってきたので、木は言いました。

「さあおいで。わたしの幹にのぼり、枝にぶら下がって、りんごを食べないかい。

木かげで遊んで、楽しく過ごしていきなさい。」

男の子は言いました。「ぼくはもう大きいから、木のぼりしたり、遊んだりなんてできないよ。面白い物をして、楽しんでみたい。だからお金がいるんだ。ぼくにお金をくれるかい。」

木は言いました。「ごめんね。お金はないのだよ。あるのははっぱとりんごだけ。りんごを持って行って、町で売るといいよ。そうすれば、お金ができて、しあわせになれるよ。」

そこで、男の子は木にのぼり、りんごをもぎとり、持って行ってしまいました。木はしあわせでした。

けれど、男の子はながいあいだ来ませんでした…

木は悲しくなりました。ある日、男の子が戻ってきたので、木はうれしきでからだをふるわせ、言いました。

「さあおいで。わたしの幹にのぼり、枝にぶら下がって、楽しく過ごしていきなさい。」

「木のぼりなんかしてられないよ。」男の子は言いました。「あたたかな家がほしい。お嫁さんがほしい。子どもがほしい。だから家がいるんだ。家をくれるかい。」

木は言いました。「わたしに家はないのだよ。この森がわたしの家だから。けれど、わたしの枝を切り、家を建てることはできるよ。そうすれば、しあわせになれるでしょう。」

そこで、男の子は枝を切りはらい、自分の家を建てるために、みんな持って行ってしまいました。木はしあわせでした。

だけど、男の子はながいあいだ来ませんでした。男の子が戻ってきたとき、木はうれしくて、ことばが出ませんでした。

「さあおいで。」木はささやきました。「さあ、ここで遊びなさい。」

男の子は言いました。「としをとって、悲しいことばかりで、もう遊ぶ気になれないよ。ふねに乗って、ここから離れ、遠くへ行きたい。ふねをくれるかい。」

木は言いました。「わたしの幹をきりたおし、ふねを作るといいでしょう。それで遠くへ行きなさい。そして、しあわせになっておくれ。」

そこで、男の子は木の幹をきりたおし、ふねを作って、行ってしまいました。

木はしあわせでした。けれど、ほんとうではなかったのです。

長い年月が過ぎて、男の子がまた帰ってきました。

木は言いました。「ごめんね。わたしにはもうなにもない。りんごもなくなってしまったし。」

「はが弱くなって、りんごをかじることもできない。」と、男の子は言いました。

木は言いました。「ぶら下がって遊ぶ枝もなくなってしまった。」

「年をとってしまったから、枝にぶら下がるなんてできないよ。」男の子は言いました。

木は言いました。「幹もないから、のぼれないしね——」

「とても疲れて、木のぼりなんてできないよ。」

木は、ためいきをついて言いました。「ごめんね。何かあげられたらいいのだけれど。もう何もないのだよ。いまのわたしは、ただの古くなった切りかぶだから。」

男の子は言いました。「欲しいものは、もうそれほどない。すわって休む静かな場所がありさえすれば。もう疲れはてた。」

「ああ、それなら」と、木は精いっぱい背筋を伸ばして言いました。「古くなった切りかぶだけれど、今でも腰かけて休むにはちょうどいい。腰かけて。腰かけて休みなさい。」

男の子は腰をかけ、休みました。

木はしあわせでした。

引用文献・参考文献

土居健郎 1971 甘えの構造 弘文堂

守屋慶子 1994 子どもとファンタジー 新曜社

Neuhaus, R.J. (Ed.) 1995 The Giving Tree: A Symposium by View The Giving Tree in *First Things*

Nida, E.A. 1966 Linguistics and ethnology in Translation—Problems. Dell Hymes(Ed.) *Language in Culture and Society*, Harper & Row, 1966

- 小澤伊久美 2005 川端康成『雪国』の冒頭部分を中心に日本語による認知について考える—中国語・英語訳と比較対照して 認知言語学会第6回大会ワークショップ お茶の水女子大学
- SIL International 2005 *Ethnologue*
- Silverstein, Shel 1964 *The Giving Tree* Evil Eye Music, Inc.
- Silverstein, Shel 1973 *L'Arbre au Grand Coeur* traduit par Hila Feil Edite Kroll Literary Agency.
- シルヴァスタイン, シェル 1976 おおきな木 (ほんだきんいちろう訳) 篠崎書林
- Silverstein, Shel 2002 *Arbor Alma* translated by Guenevera Tunberg & Terentio Tunberg Bolchazy-Carducci Publishers, Inc
- Whorf, B.L. 1956 *Language, Thought, and Reality : Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, Mass. : Technology Press of Massachusetts Institute of Technology.

(原稿提出日 平成19年9月11日)
(修正原稿提出日 平成19年11月14日)